

(9) 他の調査活動

以上年報は 41 頁にわたり、相当詳述され、興味深いものがあるが、紹介は後日とする。

(宇田道隆抄録)

6 日本海沖合スルメイカ回遊の新知見

出所：日本海区水産試験研究連絡ニュース日水研刊。第 184 号、1966 年 10 月、⁽¹⁾伊東祐方「日本海沖合のスルメイカ調査から、⁽²⁾町中茂「沖合のスルメイカ漁業と今後の方向、⁽³⁾同 186 号、1966. 12 月「日本海沖合の放流イカ韓国沿岸で再捕さる」

大和堆を中心とする日本海沖合のスルメイカは同時期の沿岸のスルメイカに比べて外套背長が大きい。また沖合群は秋季に入つて南下移動の傾向がみとめられる。1963 年 9 月 6 日～15 日日水研みずほ丸調査結果によると、分布密度の高い海域は大和堆～竹島を結ぶ海域の北西側の沖合にあるようであり、大和堆西端地点で昼間の 2 時頃から、夜間の釣獲水深より幾分深い層から夜間におとらない漁獲をえた。(近年、毎春 5 月を中心として佐渡外浦沿岸域でスルメイカの昼釣漁業が一般化している。) 沖合群の移動を検証するため約 3,000 尾の標識放流を行ない、これまでに大和堆上とその近くで放流したものうち 5 尾が放流後約 1 カ月を経過した、10 月 11～14 日の間に山陰海域(2 尾)と対馬海域(3 尾)で再捕された。その後韓国の水産振興院から韓国漁業者によつて 12 尾の再捕連絡があつた。これらは 9 月中旬大和堆付近で放流。そのうち再捕月時、場所の判明している 7 尾については、9 月 25 日～10 月 8 日の間に 38°付近から 36°N 付近にかけての韓国東岸側の距岸 30 哩から沿岸で再捕されている。沖合群の移動を検討するに貴重な資料である。

大和堆を中心とする日本海沖合スルメイカ漁場開発調査は昭和 37 年から日水研、各県水試及び漁業者の協力で推進されて来て、今日では 7 月～9 月、3 カ月間は完全に企業化され日本海漁業「夏枯れ」対策の一つとして十分な成果を収め、この漁場へ出漁する漁船の数は増加の一途をたどつている。

1966 年夏出漁石川県能登船団は 20 トン以上の船が 60 隻、12 トン未満が 4 隻、計 64 隻(小木漁協所属、日本海マス流刺網漁従事)で、延航海数 221 回、総漁獲約 3,200 万尾(水揚 1 億円を上廻つたとみられる)。船別航海数最高 8 回 2 隻、7 回 5 隻、6 回 8 隻、他は 5 回以下。一航一隻当たり平均漁業獲量 20 トン以上、大型船で 700 箱(1 箱 20 尾入)、小型船 300 箱ほど。一航で 1,600 箱もの漁獲を記録した船もあつた。好漁場となる大和堆が日本海のほぼ中央部に位置し、本土側から一番近い能登半島最先端からでさえ約 160 マイル離れているため漁場への往復 2 昼夜近くかかり、小木漁協燃油 400 万円、水代 700 万円、魚箱代 800 万円ほどで、その他経費を含め全体では水揚金額の 35% 程度になつている。

(宇田道隆抄録)

7 強化ガラスのプラスチック沿岸測量艇と漁船

1) 英国海軍水路部の発注で 8 隻 Glass Reinforced Plastic (GRP) 測量船が